様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　21 日現在

機関番号：32690
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：22720334
研究課題名（和文）　メキシコの社会空間と宗教実践をめぐる民衆文化的戦術：サンタ・ムエルテを事例として
研究課題名（英文）　Tactics of Popular Culture between the Social Space and Religious Practice in Mexico: The case of Saint Death

研究代表者
井上　大介（INOUE DAISUKE）
創価大学・文学部・准教授
研究者番号：20511299

研究成果の概要（和文）：メキシコ民衆文化としてのサンタ・ムエルテ信仰の特徴は、負のイメージが付与されたテピート地区という社会空間を含む従来の文化資源を流用しつつ、従属階級の信者に対し、特定のアイデンティティを提供し、既存の文化的カテゴリーを揺り動かすような動向を現出させていた。またその表象に関しては、グローバル、ナショナル、ローカルといった諸次元での語りが存在し、非常に流動的な言説によってカテゴライズされているといった特徴が抽出できた。同時にマイノリティ宗教の中にも正統・異端の区別が認識されており、組織化された動向はより社会的制裁と結びついているといった傾向が看取できた。

研究成果の概要（英文）：The Cult of Saint Death as the Mexican Popular Culture has following characteristics.1)Appropriating the existing cultural resources including social space such as Tepito districtgranted with negative image, 2)providing an identity of subordinate social ranks to their Believers, and 3) swaying the existing cultural category. On the other hands, the Cult possesses verbal manifestations at global, national, and local levels, characterized as categorization by uncertain verbal explanation. At the same time, it has confirmed that in the movement of minority religion, there are some categories about legitimacy and heresy, and that there is more social sanction to the institutional movement.

交付決定額

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：社会空間、民衆文化、聖人信仰、死、サンタ・ムエルテ、テピート、グローバリゼーション

１．研究開始当初の背景

(1)　先行研究（Perdigon, Judith, La Santa Muerte, México, INAH, 2008）によれば、サンタ・ムエルテ信仰は、カトリック的文脈において「神の命令により人々の死を司るとされる死神」を聖人像とする呪術的宗教習俗と

される。同信仰は、街中の祭壇に設置された骸骨への参拝を中心に、その影響力を拡大しており、聖人像崇拝、ロザリオの実践など、メキシコ・カトリシズムと多くの共通点を有している。しかし死の聖人を信仰の対象としている点で、カトリック教会からは「サタニズム的信仰」と異端視されている。また、ギジェン・ロモという人物の影響で、同聖人像を宗教的本尊として設置するに至ったイグレシア・カトリカ・トラディシオナル・メヒコ―エスタードス・ウニードスという教会(以下、サンタ・ムエルテ教会)においては、1995年に一端付与された宗教法人格が、2005 年には剥奪されるに至っており、サンタ・ムエルテ信仰は、同教会の動向も含め、カトリック教会のみならず政府からも正統性が与えられていない。しかし、同信仰習俗は、2000年代に入り急激に信者を増加するに至る。同信仰に共感する人々は、サンタ・ムエルテをカトリック信仰であると位置づけるもの、カトリックとは別の宗教であるととらえるものなど多様であるが、社会の様々な階層にその影響力は拡大しつつある。また、グローバル化とともに、テピート地区という、同信仰発展の契機となった社会空間を越境し、メキシコ各地にその領土的影響力を拡大している。

報告者が本研究に着手した段階では、同現象に対しては、死を司る信仰対象が聖母に祈願できない願い事を叶えてくれる強力な聖人であり、治安悪化が危惧されるメキシコにおいて、特に犯罪や死と直面した生活を送る人々の間で共感を呼んでいる、との説明が結論として提示されていただけであり、それ以外の観点からの分析は行われていないという状況であった。

２）報告者はこれまで、現代のメキシコ民衆文化というテーマを儀礼との関連で考察し、そこに、バフチーン（バフチーン，ミハイール『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房，1973年）が中世民衆文化の特徴として提示したカーニバル性、グロテスク・リアリズムなどが存在する点を確認した。また、アリエス（アリエス, フィリップ『死と歴史』みすず書房，2006）の指摘した「近代以降、社会において死というものが隠蔽されてきた」という説を念頭に、近代的秩序形成過程では、死やそれに付随したイメージが社会空間において不可視化される反面、民衆的土壌においては、同要素が顕在化することを指摘した（井上2008）。

一方、民衆文化研究においては、現在、アントニオ・グラムシのヘゲモニー論、及びそこから展開される戦術、流用といった概念が重視されている。ヘゲモニーとは、「支配というものが人びとの同意のもとに浸透していく状態」のことを意味しているが、ある文化的要素が社会的正統性を獲得するには、様々な権力闘争が付随している点がポイントとなる。そのような観点は、民衆文化の動的側面と関連した戦術や流用―従属階級は支配階級が提示する文化的要素を一方的に受容しているのではなく、独自の解釈、用い方によってそれらを変容させ、既存の秩序の活性化を図る―といった従属階級における文化的諸傾向へも我々の注目を促してくれる。

政府やカトリックから批判されつつも、聖人像という既存の文化要素を利用すると共に、社会で隠蔽されてきた「死」というものの表象をそこに接合し、スラム地区を中心に発展している同信仰を理解するには、ヘゲモニー、戦術といった概念が有効となる。

他方、近年の文化人類学的業績では、支配的権力に対し一定の自律性を有した社会空間の可能性に関する研究が展開されている（田辺繁治他編著『社会空間の人類学』世界思想社，2006 ほか）が、そこでは、社会構造によって規程された主体は、客体に対してどのような活力を持ちうるのか、それが集団となった場合の自立性はどこまで確保されうるのか、といった問題系のもと、ポスト・モダン地理学（ソジャ，エドワード『第三空間』青土社，2005）などを参考に、権力によって配置され統御された社会空間に対する、住人たちの文化的戦術、流用によって立ち現れるローカル文化の活力及び、身体と密接に関連した空間の可能性が模索されているのである。

サンタ・ムエルテ信仰発展の舞台となるメキシコ・テピート地区は、スペイン植民地時代より、先住民居住区として特別な意味あいが付与されてきた。現在、メキシコにおいて犯罪最多発地区の一つとして認知されている同地区は、マフィア等、非合法的活動に従事する人々の居住区となっており、体制側からは、負のイメージと関連した異質なる空間として定義されている。

そのような場所において発展しつつある宗教現象は、「社会における生命の危機意識によって発展する信仰」といったこれまでの理解とは別に、グローバル化によってローカルなものが立ち現れるとするとするグローカリゼーション（ロバートソン，ローランド『グローバリゼーション』東京大学出版会1997）や、死という反社会的表象による既存の文化的価値の流用、及びそれによる抵抗文化の顕現、そしてなによりもそのような動向の基盤としての社会空間への人びとのアイデンティフィケーションの結果として理解されなければならない。本研究では、以上の仮説のもと、民衆文化と社会空間との関連性、

象徴の越境化、それらを可能にするグローバル化の諸相、文化をめぐる被支配階級による権力闘争の可能性に等について、考察を展開し、それらに関する理解をめざしたものである。

報告者は、本研究を開始する以前に、メキシコにおける宗教運動やルチャ・リブレなど、民衆文化に関する象徴分析を中心とした人類学的調査を展開してきた。そして、社会秩序を活性化しうる抵抗の文化に関する都市人類学的研究の方向性を模索する中で、本研究に関する着想を得ることができた。

従って、これまで行った調査での経験を活かし、メキシコというフィールドをベースに、上記した主体性構築のための脱権力的空間の可能性を宗教理解という文脈において模索するというのが本研究を貫く特徴となっている。

２．研究の目的

１）サンタ・ムエルテ信仰の現地調査を通じ、民衆文化の諸特徴を抽出するとともに、従属階級の社会構造に対する主体性を理解し、さらにはそこにおける社会空間の重要性を考察するというものである。本研究では、メキシコ・シティの犯罪最多発地区の一つとして位置づけられるテピートを中心に拡大する「サンタ・ムエルテ」信仰という民衆的宗教習俗を題材に、そこにおける、信者の諸相、信仰形態・解釈、それらをめぐる社会的圧力について、同信仰が立ち現れる社会空間との関連で分析した。

２）その際、近年、文化研究において注目されつつあるヘゲモニー、戦術、グローカリゼーションといった諸理論に依拠しつつ、民衆文化の主体性、持続性、及びそれを支えうる社会空間の諸特徴を解明し、さらにはグローバル化における同信仰の諸特徴の解明を企てた。

３．研究の方法

サンタ・ムエルテ信仰及びテピート地区に関する文献調査及び、古典的なスラム街における調査手法（ホワイト，ウィリアム・フット『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣、2000）を参考とした参与観察、統計調査、インタビュー、ライフ・ヒストリーを含む民族誌の作成及び、象徴人類学的視点（井上前掲書）や社会空間に関するカルチュラル・スタディーズ理論（ソジャ前掲書ほか）等の援用により、近年拡大するサンタ・ムエルテ信仰の発展要因を、近代化、グローバル化を念頭におきながら、社会空間テピートとの関係において把握した。

具体的には以下の手順で調査を進めそれぞれのデータを抽出した。

(1) 平成 22 年度：
4 月―7 月：1－先行研究を収集・分析した（1－1 解明点・未解明点を把握、1－2 先行研究の分類により本研究の理論枠組みの妥当性を確認、1－3 教義の確認、1－4 同信仰及びテピートに関する歴史、イメージ、その変遷を確認、2－同信仰とテピートに関する言説を確認（2－1 新聞記事、政府、カトリック教会、信者のホーム・ページの内容確認）3－グローバル化について文献をもとに整理、4－第 1 回現地調査を準備（テピート在住信者への質問紙調査票作成）。
8 月：5－第 1 回現地調査を 1 ヶ月間実施し、テピートの祭壇への参拝者を中心に、同信仰をめぐる見解の多様性を把握すると共に、信者の諸相を理解（5－1 現地宗教研究者、政府宗教局長、首都圏カトリック教会広報責任者らへのインタビューにより同信仰に関する諸見解を把握、5－2 儀礼及び組織形態を観察・記述、5－3 テピート在住信者 50 人を対象に質問紙調査、インタビューを実施、5－4 信者の日常生活における言動を観察・記述）。
9 月―翌年 3 月：6－現地調査結果の分析（6－1 ライフ・ヒストリーを作成、6－2 信者の諸相、信仰解釈を把握、6－3 信者の教義、象徴としての信仰対象に関する無意識的解釈をテピート地区との関連で把握）。

以上を通じ、この期間は特に、サンタ・ムエルテ信仰の民衆文化的特徴を抽出するとともに、「社会空間との関係性」について考察を深めた。

(2) 平成 23 年度：
4 月―7 月：7－第 2 回現地調査を準備する（テピートのサンタ・ムエルテ教会関係者への質問紙調査票作成）。
8 月：8－第 2 回現地調査を 1 ヶ月間実施し、サンタ・ムエルテ教会関係者の諸相を把握（8－1 サンタ・ムエルテ教会への参拝者の参拝活動を観察・記述、8－2 彼らへのインタビュー、質問紙調査を実施）。
9 月―翌年 2 月：9－第 2 回現地調査の結果を分析した。

この期間は、特にサンタ・ムエルテ信仰において「正統・異端という側面」がどのような形で存在するのか、という点を確認した。

(3) 平成 24 年度：
4 月―7 月：10－第 3 回現地調査を準備する（それまでの結果をもとにグローバル化における同信仰の特徴を抽出した。また未解明点を把握し、対応策を考案した）。
8 月：11－第 3 回現地調査を 1 ヶ月間実施し、グローバル化との関連での同信仰の特徴を、

現地調査による言説の考察を中心に抽出した（11－1 テピートの祭壇周辺及び、サンタ・ムエルテ教会での再調査）。
9 月―翌年 3 月：第 3 回目の現地調査結果の分析及びそれまでの調査内容の総合的分析に従事し、グローバル化との関連での同信仰の特徴を考察した。

４．研究成果

(1)民衆文化的諸相：
　民衆文化の特徴が戦術－既存の文化資源を流用し、再活性化する－という点を先行研究によって整理した。またそのような特徴が既存の文化的枠組みを揺り動かす可能性として理解できる点を把握した。具体的には、「死」というものが、近代化の中で支配的影響力によって管理され社会空間において隠蔽されてきた点を先行研究で整理し、メキシコにおける「死」をめぐる文化がそれとの対局にある点、さらに、そのような死をめぐる従属階級の動向が民衆文化において重要な要素となる点を把握した。

(2)サンタ・ムエルテ信仰の諸特徴：
　サンタ・ムエルテ信仰において、囚人、犯罪者、麻薬中毒者等と関連した祈祷が存在し、儀礼においてもそのような祈りが集団で実践されているという点、また参拝者の中に性的マイノリティの存在が顕著であったというような点から、同信仰が、犯罪者、同性愛者等の社会的従属階級の信仰である点を例証した。
　また、ありあわせの材料で無計画に設置された祭壇、街路の領有、カーニバル的側面、カトリックの流用、パロディ化、自身をカトリック信者であると位置づけながらも、教会からは距離を置く態度などの諸特徴から戦術的傾向が十分に看取された。
　既存の文化資源の流用については、カトリックの諸儀礼、聖母マリア、死の表象、言語表現、社会空間などが確認できた。特徴的であったのは、カトリックの宗教・文化資源の流用においては信者において多様性が存在していたという点である。具体的には、エンリケタ・ロメロを中心とするテピートの祭壇に参集するグループとギジェン・ロモ氏を中心とするサンタ・ムエルテ教会の比較において、後者の方が、より組織的にそれらを流用するといった傾向が確認できた。

(3)サンタ・ムエルテ信仰と社会空間：
　近年のサンタ・ムエルテ信仰拡大の拠点となっているメキシコ・シティのテピート地区との関連に関しては、同地区が歴史的に先住民の存在と結びつけられてきたネガティブな社会空間であり、現在でも犯罪、売春、貧困など負の言説と結びつけられた空間の代名詞として社会的に認識されている点を把握した。そして、そこで発展するサンタ・ムエルテ信仰が、ネガティブな社会空間との連動で語られることが多いという点を確認した。さらにテピート在住の信者においては、同聖人がテピートを代表するシンボルであるとの認識が存在しており、他方、非在住者の信者においては、そこに自らの貧困状況を符号させるような認識が確認できた。社会的に負の記号を付されたテピートと、同じく負のイメージを付されたサンタ・ムエルテ信仰を同一視し、そこに自らのアイデンティティを符号するといった信者の傾向が確認できたのである。またそのような関係性の中に、集合表象としての聖なるものを認識する、といった宗教性が発現していることを確認した。

(4)サンタ・ムエルテ信仰における正統性：
　近年発展しつつあるサンタ・ムエルテ信仰においては、大きな流れとして、前述している通り、一方ではテピート地区に祭壇を設置し、月一回のロザリオ儀礼を実施しているエンリケタ・ロメロの影響下にあるグループが存在する。そして他方では同じくテピート地区にサンタ・ムエルテ教会を設置したギジェン・ロモを中心に活動を展開するグループが存在する。現地調査により、双方のグループは互いに相手集団を異端であると主張し、対立関係を示していることが確認できた。しかし、何名かのカトリック教会関係者への聞き取り調査では、前者の動向は間違った方向性ではあるが、信仰心という点では尊重しうる、といった見解が把握できたのに対し、後者に対しては、よりネガティブな見解が際立っていた。

５）サンタ・ムエルテ信仰における異端性およびヘゲモニー：
　メキシコ社会における死の表象をめぐるヘゲモニー的特徴について考察した。具体的には、テピート地区において、自宅前の祭壇でロザリオ儀礼を行い多くの信者を集めるエンリケタ・ロメロをめぐる動向、およびギジェン・ロモの教会によって展開される運動という２つの事例のうち特に後者にスポットを当て、そこでの現地調査の内容を記述しその特徴を分析した。
　結果として確認できた点は、まずエンリケタさんの祭壇に集まる信者同様、ロモ氏の教会に参集する人々も、基本的には、社会における従属階級に属する人々である点、またカトリック教会及びカトリック信者がマジョリティであるメキシコ社会においては、サンタ・ムエルテ信仰が「異端である」と多くの人々に認識されているとともに、信者におい

てもそのような社会的圧力が強く意識されているという点が確認できた。
　またエンリケタさんを中心とした動向に対し、ロモ氏の教会では、自らの運動をより「正統的」カトリック教会の文脈に即したものに変容させつつあるという事実が確認できた。具体的には、同教会の出版物によってカトリック的規範が明示されていることを筆頭に、聖職者制度が導入されている点、ロザリオ儀礼ではなくミサを重視している点、骸骨で表象した従来のサンタ・ムエルテ像を天使像に置き換えている点などの諸相からそのような傾向が看取できたのである。
　一方、エンリケタさんの祭壇に参集する人々においては、ロモ氏の教会での規範に従った傾向を批判し、サンタ・ムエルテ信仰と信者における主体性こそが同信仰における正統性であるという主張が確認できた。
　このような差異は、エンリケタさんやロモ氏などサンタ・ムエルテ信仰におけるリーダー的存在においてのみならず各所に集まるサンタ・ムエルテ信者においても「正統」「異端」というカテゴライズのもとに認識されており、双方それぞれでより正統的存在である点が強調されていた。この事実は民衆的宗教習俗として理解されうるサンタ・ムエルテ信仰においても正統性をめぐる葛藤が存在している点を例証していた。
　一方、カトリック教会における見解では、一貫してサンタ・ムエルテ信仰の異端性が強調されているが、個別のインタビュー調査においては、エンリケタさんの存在に比べ、ロモ氏の影響がよりネガティブなものとして認識されていることも確認できた。
　その理由としては、前述のとおり、ロモ氏の運動がよりカトリック教会を意識したものであり、天使像などカトリック教会の文化資源をより積極的に利用する傾向を持ち合わせていると共に、他方では、パロ・マジョンベなど、呪術的な諸儀礼を継続的に実践しているうえ、デモ行進を実施するなど社会における視覚的影響力の拡大を企てている等の点が考えられよう。
　いずれにしても、インタビュー対象となった何人かのカトリック聖職者は、エンリケタさんにはそれほど悪意を感じてはおらず、より柔軟な形で、その運動を受け止めようとするような態度が看取できたのに対し、「極度にカトリック教徒を混乱させる運動」等のコメントからも窺い知れる通り、ロモ氏に対しては非常に強い嫌悪感が表明されていた。
またそのようなネガティブな見解は、カトリック教会関係者による批判という形をとるにとどまらず、新聞、テレビなどのマスメディアによる言説という次元に展開されると共に、様々な政治的、法的次元における社会的制裁として具体化しており、現在、ロモ氏自身は、犯罪に加担したという容疑で逮捕されるという状況に至っている。それを受け、サンタ・ムエルテ教会では、ロモ氏の後継者によって儀礼などにおけるカトリック化がさらに強く推進されているという現状にあり、死をめぐるヘゲモニーの事例として大変示唆的な傾向を示していたのである。

(6) グローバル化における民衆宗教：
　理論的には、グローバリゼーションを「近代以降顕著となり、九０年代以降より急激に進行してきた国境を越える人、もの、情報の交流によって推進される個別性の普遍主義化と普遍性の個別主義化がグローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルな諸次現で顕在化する現象」と定義し、国家―脱国家、グローバル―ローカルといった二元論的枠組みを中心としたグローバリゼーション論からの脱却を試みた。
　結果として、サンタ・ムエルテの信者には、信仰対象であるサンタ・ムエルテをグローバルな言説、ナショナルな言説、ローカルな言説で表象するという傾向が存在する点が解明できた。またそれらが信仰年数とある程度の相関関係を有していたことを把握した。グローバルな言説では、神の普遍性、「死」の普遍性をベースとした信仰である、といった主張が中心であり、ローカルな言説としては、現在のサンタ・ムエルテ信仰発展の原動力となったテピート地区の貧困や犯罪というイメージと連動させた解釈が中心であった。他方、ナショナルな言説では、メキシコ文化やアステカ文化、具体的には近年、世界無形文化遺産としてユネスコに登録された「死者の日」や、アステカ文明の「死の神」との関係を示唆する主張が確認できた。カトリックとの関係については、ローカルな主張においてそれらの関係が否定されていたのに対し、ナショナルな言説においては肯定的に、グローバルな言説では、結びつきに関する主張に多様性が存在していた。信仰年数に関しては長い信者ほどよりローカルな主張と結びついているといった事実が確認できた。

(7)今後の課題
　ローカル、グローバルと関連した諸言説が生じる背景をさらに精査するというが課題が残った。またグローバル化とサンタ・ムエルテ信仰発展の関係性について十分考察できなかった。また今回の調査では、テピート地区内のサンタ・ムエルテ信仰に敵対する集団、テピート以外の地域における信者の動向について、調査が展開できなかった。それらを今後の課題として明記しておきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）
①井上大介「グローバル化社会における『民衆宗教』－サンタ・ムエルテ信仰をめぐる解釈の多様性を中心に」『ソシオロジカ』第 37 巻 1-2 号、2013 年 3 月　査読なし

②井上大介「サンタ・ムエルテ教会をめぐるヘゲモニー」『ソシオロジカ』第 36 巻 1-2 号、2012 年 3 月　査読なし

③井上大介「メキシコ・テピートのサンタ・ムエルテ信仰」『現代宗教 2011』　秋山書店 2011 年 5 月　査読なし

〔学会発表〕（計　3 件）
①井上大介「グローバル社会における民衆宗教 ― サンタ・ムエルテを事例に―」日本宗教学会第 71 回学術大会 2012 年 9 月（於：皇學館大學）

②井上大介「サンタ・ムエルテ信仰をめぐる正統性とその変化」日本宗教学会第 70 回学術大会 2011 年 9 月（於：関西学院大学）

③井上大介「メキシコにおけるサンタ・ムエルテ信仰の諸相」日本宗教学会第 69 回学術大会 2010 年 9 月（於：東洋大学）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
井上　大介（INOUE DAISUKE）
創価大学・文学部・准教授
研究者番号：20511299

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：